



大学教育とビブリオバトル

鶴 衛 学長

大学の図書館は時代とともに変化している。従来は、静かに本を読んだり、文献を調べたりする場所であるとされてきたが、最近では、学生の自学自習を支援する「ラーニングコモンズ」として位置付けられている。しかし、それだけでは説明としては不十分になってきた。新たに、“バトル”の場としての機能が加わりつつある。

バトルとは少々不謹慎だが、知的書評合戦と訳される「ビブリオバトル」のことである。詳しいコ

ンセプトや内容については本号の特集に譲るが、本学においても取組みが始まっている。

普及委員会によると、一人5分間で順番に本を紹介し、発表に関するディスカッションを2～3分ずつ行う。一番読みたい本に投票し、最多票を集めたら「チャンプ本」になる。公式ルールも確立されている。ゲーム感覚で他の学生や教員と双方向のコミュニケーションを深めることができ、双方向には「本を通して人を知る」「人を通して本を知る」意味合いもあるという。

本の世界では書評会などが行われているが、どうも堅苦しさがつきまとう。スポーツで例えれば、書評会が「サッカー」とするなら、

ビブリオバトルは気軽に集まってできる「フットサル」に当たるようだ。子どものころからコンピューターゲームに慣れ親しんだ若い世代にとってびったりのネーミングであり、ルールであるように思う。

近年、大学生の読書離れが問題になっているが、ビブリオバトルがその流れに歯止めをかけてくれれば、と願っている。ビブリオバトルはもともと大学の研究室内で誕生したと聞いている。キャンパスのあちこちで“バトル”が繰り広げられれば何と素晴らしいことか。本学においてビブリオバトルが活発になることを期待している。

図書館の「祭り」、 ビブリオバトル！ 三熊 祥文 館長



読書と言えば個人的な嗜好であるとの認識が一般的であろうと思います。あるいは大学での図書館利用による読書を考えても、自己の研鑽であり、すなわち個人的な営みであると考えられてきたのではないのでしょうか？一方で、アクティブラーニングや協働学習の必要性が声高に叫ばれ、学びは社会的なものなのだという考え方が受け入れられつつあります。さて、読書に社会性はあり得るのでしょうか？

今年、本学図書館では初めてビブリオバトルを開催しました。ビブリオバトルとは、バトル（発表する人）が自分の読んだ本についてプレゼンし、観戦者がその発表を聞いて、「どの本が一番読みたくなったか」を基準に投票

してチャンプを決めるという、いわばブックレポートを公開するパフォーマンスです。第一回目の優勝者は広島地区大会を勝ち抜き、全国大会へと進出を果たしました。

素晴らしいスタートを切ったビブリオバトルですが、よく考えると上記の通りビブリオバトルとは本来教師に対して提出するブックレポートが音声的、映像的に教師ではない一般の聴き手に対してプレゼンされ、共有され、評価されるというイベントですから、「個人的なもの社会化」であると言えます。聴き手の評価を反射させることによって自らの読みを再吟味したり、新たな感慨に浸ることができるということから、聴き手との協働作業としての読書だ

と意味づけることも可能です。読書も「アクティブ」に「協働学習」の中に位置づける可能性を最高の結果で示すことができた今年のビブリオバトルは、非常に意義深いと言えます。

これからは、読書とは他人と共有できるものなのだというスタンスでますますページをめくっていきましょう。読書はより大きな意味をあたえてくれる営みとなるでしょう。